

## 大阪国際交流センター・ラジオクラブ 平成20年度総会

平成20年4月19日午後2時から大阪国際交流センターにおいて大阪国際交流センター・ラジオクラブ平成20年度総会が行われました。

出席者 : JA3AA, JA3AER, JA3AOP, JA3PYC, JA3TXZ, JA3USA, JA3VWT, JE3BEQ,  
JH3AEF, JK3YB, JO3BAV (12名)

開会に先立ち、サイレントキーとられた故三好二郎氏のご冥福を祈り、黙祷を捧げました。

JA3AA島会長のご挨拶の後、平成19年度の事業報告、平成20年度の事業計画を審議しました。続いて会計報告ならびに会計監査報告が行われました。本年は役員改選時期ではないので引き続き下記の役員で運営を行います。

会長 JA3AA/島

理事 : JA3AER/荒川(例会) JA3AOP/杉山(NL)

JA3PYC/山本(RC, 局設備) JA3USA/島本(Web)

監事 : JA3VWT/中野 会計 : JO3BAV/上田

メールリストの運営は引き続きJH3GAH/後藤さんのお世話になります。



## Asia Pacific DX Convention (APDXC) 2008

Nov. 7-9 2008

APDXC 2008 が大阪国際交流センターを拠点に開催されます。

コンベンションへの参加ならびにご協力をお願いします

<http://apdx.org/index.html>

## 関西アマチュア無線フェスティバル2008 2008/7/19-20 池田市民文化会館

大阪国際交流センター・ラジオクラブは今年も出展致します。ご協力お願いいたします。

<http://kanham.jpn.org/>

## 大阪国際交流センター・ラジオクラブ

Roll Call : 0900 JST Saturday

e-mail : [ji3zag@ji3zag.net](mailto:ji3zag@ji3zag.net)

大阪国際交流センターラジオクラブ総会 (2008年4月19日)

## 西堀榮三郎先生のヤルン・カン登頂時のアマチュア無線通信

JA3AER 荒川泰蔵  
e-mail : ja3aer@ares.eonet.ne.jp

要旨: 西堀榮三郎先生の業績は、品質管理の分野だけでなく、南極観測、登山、真空管の開発、原子力、ヨットによる航海等々、多くの分野で活躍された。八ヶ峰と呼ばれる所以である。これら多くの分野での体験が後の品質管理を含む企業への指導に生かされたことは言うまでもない。ここではその内、登山に関する業績の中で、ヤルン・カン登頂時の通信に焦点を当ててみた。1973年3-5月、8,000mを越えるエベレスト山系の世界で5番目に高い末踏峰のヤルン・カン(8,505m)への挑戦時、70歳であった西堀先生は京都大学学士山岳会(AACK)の登山隊の隊長として活躍された。電気は勿論何もない海拔5,000mのベースキャンプからいかにネパール政府や日本の支援者との通信を確保するかを考えられ、南極越冬時に経験したアマチュア無線を通信の手段に選ばれたものと思われる。しかし、これに絡んだ幾つかの問題のため、ご本人を含む登頂時の隊員は多くを語られなかったが、残された資料から当時の苦勞を推察してみた。

### 1. 西堀榮三郎先生のこと

#### 1-1. 西堀先生との出会い

1979年に西堀先生がシャープ株式会社の本社及び各事業本部で講演された講演集「シャープ品質管理30周年記念 西堀榮三郎博士講演集」が、駐在先のシャープ米国販売会社に送られてきたのは1980年12月になってからであった。これが後に「品質管理心得帖」として日本規格協会から発行されることになり、本社からの指示でジュラン博士に推薦文を書いて頂くため、ニューヨークにあるジュラン博士の事務所を訪れた。しかしこれは第1刷の間合わず、掲載は第4刷以降になった。その後1982年に西堀先生がニューヨークに滞在中と本社から連絡があり、この「品質管理心得帖」をもって滞在されているホテルを訪ねたところ、内表紙に大きくサインをして下さった。このとき先生はシャープから頂いたとプログラム可能なポケット・コンピューター(PC-1500)を手にしておられ、ヨットで航海中に星座を観測して現在の位置が容易に計算できると喜んでおられた。私には難しく良く分からなかったが、先生に直接お目にかかったのはこのときが最初で最後であった。

西堀先生と共に過ごされ、直接教えを受けられた多くの先輩諸氏に、一度しかお目にかかったことのない私が、先生のことについて語る資格のないことは承知の上で、しかも、先生が語りたくなかった、または公には語れなかった部分を明るみに出すことには躊躇もあるが、今、語らなければ多分永久に知られないことになるだろう。比較的短期間に各方面から私のもとに資料や情報が集まってきたことは、先生が私に「理解のある諸先輩に話しておいてくれよ」と言っておられるような気がして、今回あえて話をさせて頂くことにした。これによって良い意味での話題が更に広がることを期待したい。今回のテーマである「ヤルン・カン登頂」から今年はずっと35年に当たる。

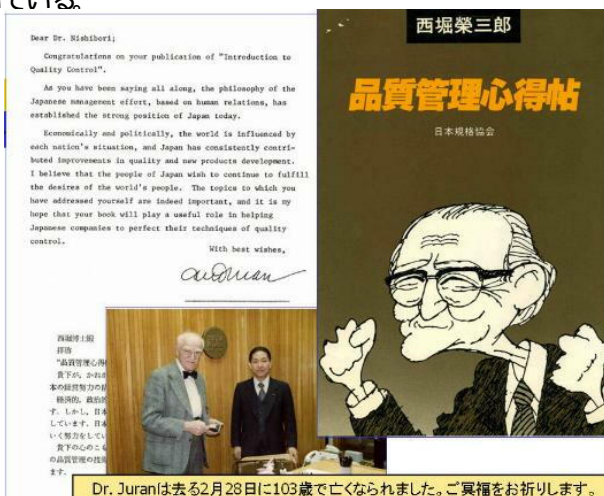
また、先にあげた「シャープ品質管理30周年記念 西堀榮三郎博士講演集」には、「品質管理心得帖」には掲載されていないシャープ独自の付録的な記事があり、当時の会社幹部の座談会や、シャープ品質管理年表の他、シャープでの品質管理の草分けであった木田敬造さんの特別寄稿が掲載されている。そこには、1949年にわが国で初めて「QC講習会」が、GHQの主催で開催された時、これに出席したり、西堀先生の講演会に出かけたりして勉強し、シャープのQCが始まった旨の記述があり、その頃からシャープは西堀先生の指導を受けていたことがうかがえる。残念ながら、その木田さんも昨年2006年に他界された。

#### 1-2. 「西堀かるた」とモチベーション研究会

私が米国から帰国したのが1988年であったが、京都大学名誉教授の近藤良夫先生に紹介して頂いたジュラン博士には米国滞在中に何度もお会いする機会があった。1990年には再び海外勤務を命ぜられシャープ英国生産会社に8年間勤務し1998年に帰国して定年を迎えた。英国での品質管理の責任者として、品質管理業務の現地人社員化に成功した経験をシャープの人材開発センターで若い技術系社員に実践的品質管理の一環として教える間に、関西大学の泉井力先生から誘いがあり、2002年の春学期から関西大学の工学部で「品質管理」を教えている。講義のなかで「西堀かるた」を紹介し学生達に独自の「品質いろはかるた」を作らせている。「西堀かるた」を講義テキストに掲載するにあたり、それを制作された「モチベーション研究会」の近藤先生や工藤義二先生にその許可を求めたところ、快諾頂いた上に、工藤先生は関西大学に近いからと教室に向いて下さり、学生達に「西堀かるた」と西堀先生の考え方を講義して下さいました。毎年「品質管理」の講義を始める前に、ジュラン博士、デミング博士、西堀榮三郎博士を知っているか、と学生達に問いかけているが、手を上げる学生がなくゼネレーション・ギャップを感じている。

このような関係もあり、近藤先生や工藤先生に誘われて2004年からモチベーション研究会の末席に加えて頂き、西堀先生の考え方を勉強させて頂いている。

#### 1-3. 西堀榮三郎記念 探検の殿堂



### 1-3. 西堀榮三郎記念探検の殿堂

滋賀県の湖東町(現東近江市)に1994年に開館した「西堀榮三郎記念探検の殿堂」と言う博物館があり「西堀榮三郎生誕100年記念」の行事に、近藤先生やモチベーション研究会のメンバーの方々に連れられて訪問したのは2003年であった。この記念行事では第一次南極越冬隊の生存隊員2人の講演を聞く機会を得た。通信を担当されたJA1JG作間敏夫さんにお目にかかれ、私の趣味がアマチュア無線でコールサインがJA3AERと自己紹介して、親しく話ができたのは幸運であった。この「探検の殿堂」はQCサークル誌2003年3月号のほか多くの書籍で紹介されているのでご存知の方も多いと思うが、西堀榮三郎記念室のほか撰氏マイナス25度の南極体験ゾーンもあり、また西堀先生を含む近代の日本人探検家50人の感動的な場面を描いた絵画で紹介している。また、南極越冬時のタロー・ビローの銅像が配された庭には、南極での雪上車や、先生のヨット、ヤルン・カン号も展示されている。

## 2. 南極越冬とヤルン・カン登頂

### 2-1. 第1次南極越冬と無線通信

昨年2007年は「南極地域観測事業開始50周年記念」として記念のコインや郵便切手が発行された。「西堀榮三郎記念探検の殿堂」でも7月21日から9月2日にかけて、夏季企画展「南極との通信 昭和基地と日本をむすんだ50年」が開催され、初日には作間敏夫氏の講演があった。

先に大学生に西堀榮三郎博士を知っているかと問うても誰一人知る人はいないと述べたが、第1次南極越冬隊長の西堀さんのことだと言うかなりの学生が「南極越冬による極地観測事業はそれ以来継続して大きな成果を上げているので知る人が多い。しかし、最初の越冬を試みた西堀先生にとっては南極が若い時からの夢であったとは言え大きな勇気と覚悟がいったものと思われる。西堀かるたに「若いときの夢はかなえられる」や「勇気をもって挑戦を」がある。

隊員たちの中には生きて帰れないとの覚悟から遺言状を残したというエピソードも聞いた。こんな孤立した極地での生活のなかで「無線通信」が果たした役割は非常に大きく、この通信がなければ、南極越冬もできなかったのではないかとされている。西堀先生はこの越冬でJA1JG作間隊員にアマチュア無線を許し、その後の越冬でも引き続きアマチュア無線局が運用されてきた。この歴史が夏季企画展「南極との通信 昭和基地と日本をむすんだ50年」によく展示されていた。

### 2-2. ヤルン・カン登頂と無線通信

ちょうどこの夏季企画展の最中の8月2日に、「アマチュア無線関係者各位」として、学芸員の角川咲江さんから、下記のような文面のメールと写真が届いた。

「最近、AACKに残っていた西堀資料を当館に寄贈いただけることになり、今朝その荷物が届いたので、早速梱包を解いて見てみました。内容は、ヤルン・カン登頂当時、ネパール政府から許可を得た無線関係の書類と、西堀榮三郎さんのQSLカードです。これらについて情報をいただきましたら、ご協力をお願いいたします。ちなみに、ネパール政府からの許可資料は1973年4月22日に発行されたもので、LICENCE NO 43/1973.とあります。QSLカードは「JF1M FU 9NAP in NEPAL MOBIL」とかかれてあります。」

ヤルン・カン登頂についても探検の殿堂に展示があり西堀先生の偉業の一つではあるが、南極越冬のそれに比べると関連した書籍なども少なく一般には良く知られていない。西堀先生はこのとき70歳であったが、AACKの登山隊長として、海拔5,000mを越すベースキャンプまで酸素ボンベ無しで登られ隊員を激励されたという。このとき隊員間の通信にはCBが使われたが、ネパール政府や日本の支援者との通信にはアマチュア無線が使われた。西堀かるたに「目的は絶対 手段は自由」や「なんでもやるパイオニア精神」がある。

## 3. 通信手段としてのアマチュア無線

### 3-1. 順調に進んだ当時の情報収集

角川さんからのメールは、AACKから贈られた資料を探検の殿堂に展示するに当たり、それを説明するための情報を得たいものと受け取った。

アマチュア無線は私の最大の趣味であり、何かお手伝いできないものかと考えた。まずこのライセンスと2種のQSLカードを見せて頂こうと、彦根市在住のアマチュア無線家JA3APU直原興三さんを誘い探検の殿堂を訪問した。ライセンスの文面からこの免許は西堀先生個人にはなくAACKに対してのものであり、コールサイン9NAPや、指定周波数の9450kHzはアマチュア無線のそれではなかった。しかし、無線機器は八重洲無線製のアマチュア無線用FT-75とFT-101である。また、2枚のQSLカードには交信の記録がない空白のものであったが、東京のご子息西堀峯夫さん宛てにネパールから郵便はがきとして差し出されたものであった。

角川さんからの依頼もあり、アマチュア無線家の協力を得てこれらについて調べてみようと思い、所属する「大阪国際交流センターラジオクラブ」の月例会や「JANETクラブ」のML等で、これを知る人がいないか打診してみた。そして後に「モチベーション研究会」の月例会でもテーマの一つとして持ち出し、知る人がいないか打診した。モチベーション研究会の主宰者、京都大学名誉教授の近藤良夫先生は、元AACKの会長である。

その結果、大阪国際交流センターラジオクラブのメンバーJH3AEF東條純一さんが、当時の西堀先生と無線交信したとして、そのログ(交信記録)とネパールから投函された先生のQSLカードを見せてくれた。また、JANETクラブのメンバーからも種々情報が寄せられ、モチベーション研究会のメンバー井上潤さんからも当時の記憶などの情報が寄せられた。このほか多くの関係者から色んなコメントをお聞きし、これらを資料として私なりに考察を試みている内に、東條さんから当時の朝日新聞が出てきたと、また西堀峯夫さんから探検の殿堂を経由して「登頂中の通信記録」が見つかったと、その現物を貸して頂いた。



免許状に記載された無線通信機(webから)

### 3-2. アマチュア無線を選ばれた理由

西堀栄三郎先生は南極越冬でアマチュア無線の有用性を十分に認識しておられたと思われる。それをヤルン・カン登頂に際し孤立無援の環境におかれた場合の通信手段にそれを選ばれ、出発前に急遽勉強して無線従事者と無線局(JF1MFU)の免許を得られたものと思われる。これは東條さん宛てのQSLカードに「何分一夜づけでHAMになったのですから礼儀も技術も知らず御迷惑ばかりかけていて申わけありません。70才の老人が一生懸命勉強して、何も無いヒマラヤの山中でHAM交信をさせていただいたことだけでも感謝せねばなりません。」と書かれていることから明らかである。

書籍「ヤルン・カン」に持参した通信機類として、無線機FT-75, FT-101、発電機E80, E300、そしてアンテナとしてパーティカルグラウンドとダブルインバーターEがリストされている。

実際に西堀先生と無線で交信した東條さんの交信記録(ログ)と彼の証言(記憶)から、他に通信手段のない場所からのアマチュア無線通信は非常に役に立ったものと思われる。最初はカトマズ在住のアマチュア無線家、9N1MMモラーン神父のシャックからのゲスト運用かと考えたが、先生の行動日程・居場所などの記録からそれはありえず、日本との交信は遠征途中のツェラム(海拔3,800m)というところからであった。

登頂時の隊員だった吉野熙道さんも、書籍「人生にロマンを求めて」の中で「ヤルン・カンでの西堀先生」と題した追悼文に、先生は出発準備や公務のお忙しいなかで、無線の免許を取られたとのことでした。当時まだ一般では珍しかった太陽電池を電源として「ヒマラヤから初めて日本と交信して、気象情報を受けて登攀に役立てるのや」という先生の科学的パイオニア精神には感服したものの、その関係の装備だけでも数人分のポーターが必要となりポーター不足やストライキでキャラバンが遅々として進まなかった時、私たち若い隊員は、「おしいちゃんのお遊びにはまいるなあ」と嘆いたものでした。ヤルン氷河入口のツェラムについて、無線機やアンテナに取り組んだ先生は、楽しそうに隊員やポーターたちに説明し手伝わせ指導しつつ、あの名高い「西堀流」であれこれと工夫を凝らしておられました。」と記されている。

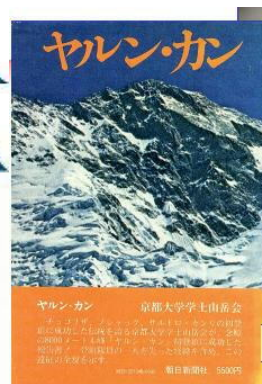
比較的小さな通信機と簡単なアンテナで日本とほぼ確実に通信が出来たのはサンスポット(太陽の黒点)の多い「サイクル20」のピークに近かったためである。先生がこれを計算に入れておられたかどうかは不明であるが、実に幸運であった。

### 3-2. アマチュア無線を選ばれた理由

米田治雄氏 (JA1ANG)



ネパールのモラーン神父 (9N1MM)  
当時唯一のアマチュア無線局



探検の殿堂の展示

### 3-3. アマチュア無線での通信の内容

東條さんとの交信はほぼ連続的に行われているが、その期間は3月23日から5月9日までであった。ただ、ベースキャンプに向かっておられた4月16日から4月23日までの期間中は交信が確認されていない。また「登頂中の通信記録」によると、その後も5月16日まで日本との交信が続き、アマチュア無線局約50局のコールサインが記録に残っている。

この地ツェラムに商用電源があったとは考えられず発電機を持参していることから、最初エンジン発電機によって電源を得たものと思われた。しかし、東條さんは通信中に天候との関係を何回か聞いたため、電源は発電機ではなく太陽電池とバッテリーだったのではと推測している。また、西堀峯夫さんの手記(記憶)にも、「シャープの佐々木正氏を通じて太陽電池の提供を受けた」と記して、通信中に太陽電池の話の話を聞いているし、その佐々木さんは西堀先生の追悼文で「…ヒマラヤに登る。短波を持って行く。折りたたみのできる太陽電池を電源として使いたい。すぐ入用。これは間に合った。帰国後、役に立ったよと笑いながら写真を見せてもらった。…」と記している。通信機の電源は太陽電池(充電電池を含む)だったことに間違いはない。そうだとすると通信時間にはかなりの制約があったものと思われる。

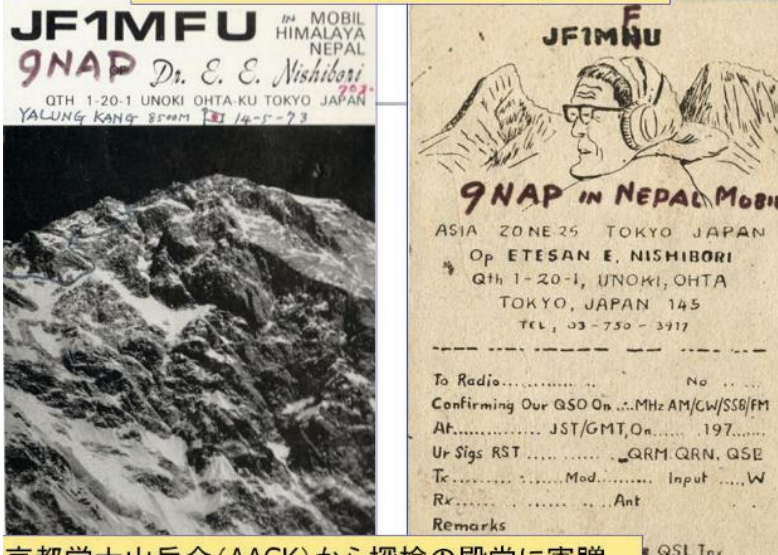
また通信の内容については、西堀先生のQSLカードに「アンテナの計算など何かと御世話になり厚く御礼申し上げます。」と書かれていることから、アマチュア無線に関しては初心者であり、アンテナについての助言のほか、日本での支援者との連絡のための交信が多かったと思われる。また、西堀峯夫さんからお借りした「登頂中の通信記録」をみると、通信の多くは登山に欠かせない気象情報を得るためのものであったが、隊員の遭難も伝えたものと思われる。

西堀峯夫さんは当時の事を手記で「鶴の木の東側の軒に大変大きなアンテナを見つからない様に立て、アンテナの方向をネパールの東ヤルン・カン方向にセットして毎日定時交信をしていました。たしか午後の3時過ぎと記憶しています。私は大学からこの時間には必ず帰って来ていました。丁度ヤルン・カンのツェラムが正午時で太陽電池がフル充電される時間帯です。父の交信は電池の容量と太陽電池の充電状況で約30分が限度で、最初の10-15分は関西の事務局とオフィシャルな定時交信次の10-15分に鶴の木と交信してしま

た。この途中父のネパールからのコールサインが珍しいので色々な方が割り込んで来て、父も何度かその方々に「今重要な話をしておるさかいに 大阪の誰それに登録してくれ、時間が余ったらコールサインの交換をするよってニ」と言っていた事をハッキリ覚えてます。又「もう電池がないよってこれでおしまいや」とか「太陽が雲に隠れて電池が切れてきよった、交信終わり」など 現地で苦労している様子が伝わってきました。」と述べている。

また、西堀富士夫さんも当時のことを思い出し、ヤルン・カン遠征の際に、ベースキャンプの親父さんと交信すべく、当時富士夫は新宿の公団に住んでおりましたので、鶏の木の家の大屋根にあるレンガの煙突にアマチュア無線のアンテナを立てて、毎日夜7時に鶏の木に向かい、交信を試みていました。今思い出しても、鮮明な声が聞え、上手く交信出来きた時は飛び上がるほど嬉しかったです。一度そう成ると、後は、30分ほど同じ時間に毎日話をしていました。丁度、隊員のお一人が遭難された時で、話はその事ばかりでした。その情報は日本の留守隊の方にもお知らせしていた様に記憶しております。」と手記で述べている。

西堀先生のQSLカード(2種)



京都学士山岳会 (AACK) から探検の殿堂に寄贈

3. 通信手段としてのアマチュア無線

3-1. 順調に進んだ当時の情報収集



探検の殿堂にて(2007年8月15日)

3-3. アマチュア無線での通信の内容

ミニログ

DATE TIME	CALL SIGN	FREQ MC	SENT RST	RCVD RST	MODE
	JA7ERK	21.492	51	54	Asp
15.00	JA7MFW	21.492	51	54	Asp
15.00	JA7BUP	21.492	51	54	Asp
15.00	JA7ERK	21.492	51	54	Asp
15.00	JA3VHQ	21.492	51	54	Asp
15.00	JA3VDU	21.492	51	54	Asp
15.00	JA3VHQ	21.492	51	54	Asp
15.00	JF1MFU	21.492	51	54	Asp
15.00	JF1KGR	21.492	51	54	Asp

東條先生の交信記録(1973)

東條先生の交信記録(1973)

Handwritten notes and diagrams showing antenna calculations and frequency logs.

Diagram:  $Q = \frac{Z_0}{f(MHz)}$

Frequency Log:

3.55MHz	20.84	14.15	21.49
14.15	10.45	14.15	21.49
21.49	5.21(SA)	9.50	21.49
21.49	3.45	9.00	21.49
21.49	2.89	14.15	5.01 (AM)
21.49	2.79		

Log Table:

15.00	JF1MFU	51	54
15.00	9N1MM	56	58
15.00	JF1MFU	20	55
15.00	JA3VDU	20	55
22.00	JF1MFU	51-57	55
19.00	JF1MFU	51.0	55
23.00	JA3VHQ		57
	JA3VDU		
	JAS3FHU	55	58
15.00	9NAP	52	56

東條先生 (JH3AEF) あてのQSLカード

QSL card addressed to JH3AEF, featuring a drawing of a man with glasses and headphones, and handwritten text in Japanese and English.

Text on card: JF1MFU, ASIA ZONE 25 TOKYO JAPAN, TESAN E, NISHIBORI, -20-1, UNOKI, OHTA, TOKYO, JAPAN 145, TEL. 03-750-3917, H3AEF, Our QSO On 21.49 MHz AM/CW/SSB/FM, JST/GMT, On 197.3, QRM QRN, QSB, Mod, Input, W, Ant, FB QSO Pse QSL Tx

Handwritten notes: DR. TOJO, DR. HARADA, 東條様, OSAKA, JAPAN

朝日新聞夕刊 (Asahi Evening News) clipping from May 16, 1973, titled 'ヤルン・カン征服 8500mの未踏峰' (Yarlung Kang Conquest: Untouched Peak of 8500m). The article reports on the successful summit of a peak in the Himalayas by a team from the University of Kyoto.

Headline: ヤルン・カン征服 8500mの未踏峰

Sub-headline: 二隊員、苦闘の登頂

Text: アマ無線で第一報 (First report via amateur radio)

Photo: A group of people on a mountain peak.

当時の新聞報道(1973年5月16日) - 東條氏提供

## 4. 通信をめぐるトラブルとその後

### 4-1. 通信をめぐるトラブルについての考察

しかし、この辺りのアマチュア無線通信に関する記述が書籍「ヤルン・カン」にもなく、情報を知る人が少ないのは、西堀先生が「ヤルン・カン」の「まえがき」で自ら記しておられるように無線通信をめぐるある種のトラブルがあって、あえて記述を控え、帰国後も公に語る事がなかったからであろう。

「……こうしたご支援があったからこそ、ヤルン・カン初登頂という成果をあげることができたのだ、ということを私は強調しておきたいのです。このような信頼関係がありながら、私達の不注意から、登頂後に無線通信をめぐるトラブルが起きたことで、ネパール政府の関係の方々にご迷惑をおかけしてしまったことは、いくえにもおわびせねばなりません。ネパール政府のあたたかいご配慮により、この問題の結着はつきましたが、私たちは誠意をもってこれを償い、二度とこうしたことの起こらぬよう、そしてこれまで以上に両国の信頼関係を緊密なものとするべく、努力する所存であります。」と記されている。

この通信をめぐるトラブルとは何かは想像の域を出ないが、次のことが考えられる。

1. 無線局の免許以前に日本のコールサインで通信を行ったこと。また免許の内容がアマチュア無線のものでないのにアマチュア無線通信を行ったこと
2. 登頂の成功と遭難者を出したことをアマチュア無線で伝えたため、ネパール政府にその情報が入る前に、日本に伝わってしまったこと

上記1.については両国間で相互運用協定が結ばれていない限り、日本の免許でネパールから電波を出すことは違法であり、日本は当時どの国とも相互運用協定を結んでいなかった。ネパールとの間には今も協定がない。また、免許を得てからも指定の周波数で運用していないことは違法である。しかし、当時のネパールでは電波行政や監視システムが充分であったとは考えられず、多分これらの通信については口頭でネパール政府の了解を得ていたのではないと思われる。また、ネパールでの運用については日本の主管庁は関与しないが、登頂中の通信記録(5月12日)に「HAM合法、Fath. 日大使、外ム、京大」の文字が見えることから、日本のアマチュア無線家達との交信中に合法性についての指摘(質問)があって、JH3MXM原田直彦さん(AACKのメンバー)を通じて日本大使館や外務省、京都大学に確認を取ったものと思われる。その結果の記録はないが、その後も通信を継続しておられることから、合法性については確信を得たものと思われる。

次に2.について、東條さんは帰国後の西堀先生に会った際、無線通信についてまずいことがあったことを聞いているが、それは無線通信そのものの問題ではなく、登頂に関する対外的発表に関するものであったらしいとし、当時、登頂に関するアナウンスは、必ずネパール政府を経由し、ネパール政府が対外的に発表するというのが慣例であった。遠征隊は登頂成功の報を当然慣例に従って第一にネパール政府に発信したのであるが、有線連絡ができる地点まで伝令を走らせて行われるネパール政府への報告には相当な時間が必要であった。一方、バンドがオープンする時間帯まで待って行ったハムでの登頂成功の第一報のほうは瞬時に日本に届いてしまった。この事実が後になってネパール政府の知るところとなり問題となったような話であったように記憶する」と述べている。東條さんはまた、登頂の第一報を当時協力し合っただけで交信を続けていた大阪市のJH3MXM原田さんから電話連絡を受け一緒に受信したように思うが、当時興奮の中であって記憶と記録が明瞭ではない旨述べている。

この他に、書籍「未知なる山、未知なる極地」最後の「解説」の中に、「ヤルン・カンでは、試験段階の太陽電池で電気を起こし、出発直前にアマチュア無線の資格をとって、頭越しに直接日本と交信し、ネパール政府から登山法違反で召喚のうきめにあう」と記されており、登頂時の隊員だった斎藤惇生さんも、書籍「人生にロマンを求めて」の中で、「医師として参加したヤルン・カン」と題した追悼文に、「西堀さんは天気予報などの情報を得るために、現地から日本と直接通信を目論まれた。募金活動の合間をぬってアマチュア無線の資格をとられた。学科はすぐ合格したが法規はなかなか覚えられず困った。結局一人で特別試験を受けて通してもらったと、嬉しそうに裏話をしておられた。」そして更に「ツェラムではまだ試験段階であったシャープの太陽電池を使い、電燈をつけられた。そしてアンテナを立てて、前線との無線連絡を始められた。さらにインド洋の日本船、それを中継して日本、最後はとうとう日本と直接交信ができるようになり、日本からの気象情報も入ってきた。しかし、これは完全にネパール政府の許可していない違法行為であった。アタック前から日本のアマチュア無線家たちは、西堀報告に先を争って応答してきた。アタックのあとの松田隆雄の遭難、上田豊の救出も、日本には西堀さんの連絡発信が入り、それが傍受されて、ネパール政府より先先に知っていた。ダマン大尉は横にいて、それが違法であることを知っていたため、内心たいへん困っていたらしい。しかしパパ西堀のすることなので、結局見て見ぬふりをしたというカトマンズに帰られてから、ネパール政府との間に当然悶着があった。結局は西堀さんのネパールにおける実績と盛名が効いて、逮捕・監禁は免れて始末書で済んでしまった。」と記されている。ただ、この記述に「これは完全にネパール政府の許可していない違法行為であった。」とあるのは、多分、発行が遅れたネパール政府からの免許状のことを知らずしての記述と思われる。

当時の朝日新聞(1973年5月16日付け夕刊)の記事にはアマチュア無線の貢献を強調するもネパールのコールサインの使用や、松田隊員の遭難については一切触れられていない。この報道は登頂が成功した5月14日から2日目の早さであった。

いずれにせよ、ヤルン・カンからこのアマチュア無線の交信での情報の伝達以外に、日本と直接交信が出来たと言うことは登山隊一行にとっては非常に心強かったと思う。孤立無援の中での登山活動より、いつでも定期的に日本と交信でき日本からのサポートや激励を得る活動とは、精神的にも大きな違いがあったものと思われる。このようなことで、いくつかの問題はあったとしても、アマチュア無線が国際的な大事業に役にたった好事例ではないかと思う。

## 4. 通信をめぐるトラブルとその後

### 4-1. 通信をめぐるトラブルについての考察



西堀峰夫氏提供

ヤルン・カン登頂中の通信記録  
(1973年5月6日～16日)



探検の殿堂の案内パンフレット



ニューヨークにて(1982)



#### 4-2. 「大人の探検倶楽部」設立と南極との交信を目指して



越冬隊員の近藤氏の壮行会(2007年11月17日)

#### 4-2. 大人の探検倶楽部 設立と南極との無線交信を目指して

2007年11月7日、「探検の殿堂」の角川学芸員からメールで「……このたび、多くの方にご協力いただき、探検の殿堂内にアマチュア無線のクラブ局を立ち上げたいと別紙の内容で賛同者(大人の探検倶楽部への登録)を募っております。つきましては、添付資料をご覧の上、是非ともご検討いただきたく、お願い申し上げます。」と関係者に呼びかけがあった。この別紙(添付資料)には次のような案内(一部抜粋)があった。

今年の夏季企画展「南極との通信 - 昭和基地と日本をむすんだ50年 -」(南極・越冬50周年記念事業)を契機に、短波無線を利用して南極の昭和基地と交信ができるよう探検の殿堂内にクラブ局を開設したいと考えようになりました。そんな考えに東近江市内のアマチュア無線家の方々が賛同して下さり、ご協力いただけることとなりましたので、地元のアマチュア無線家を中心に、近隣・遠方の方々にもご協力をお願いしながら、本格的に準備を進めていくこといたしました。そんな動きの中、この11月末に第49次南極地域観測・越冬隊の通信隊員として、南極へ向かうことが決まった近藤巧氏(滋賀県大津在住・エフエム滋賀勤務)が出発直前の大変お忙しい中、探検の殿堂へお越し下さることとなりましたので、11月17日(土)に「大人の探検倶楽部 Vol. 2」を設定しました。南極の近藤氏と交信できることを期待して、この日を開局へ向けての第一歩としたいと存じます。」そして、予定通り11月17日にはJG3PLH近藤巧さんを迎えて「大人の探検倶楽部」の会合が持たれた。

その後12月15日には「探検の殿堂無線倶楽部局(仮称)設立準備会」の第1回会合が開かれ、具体的な取組みが始まった。2008年の秋に南極基地の近藤巧さんとの交信が当面の目標である。現在サンスポットは最も少ない谷にあり電離層を利用する遠距離通信は容易ではないが、ローカルのアマチュア無線家達の努力に期待したい。西堀から「みんなでやる前向きに」や「向上心があれば飽きることがない」がある。西堀先生が南極やヤルン・カンで活用されたアマチュア無線通信の継承について、「探検の殿堂」主導で有志の団体が動き出してくれたことは嬉しいことである。

#### 4-3. 今後の課題と期待

以上の考察は限られた資料からであり、当の西堀先生は既に亡くなっておられて直接確認することが出来ないため、その多くが推察であるが、これで「探検の殿堂」がAACKから贈られた資料を展示する当面の十分な情報であると思う。しかし、今後アマチュア無線の専門雑誌「CQ ham radio」にこの報文を一部書き直して投稿したいと考えており、その読者から新たな情報の提供が得られるかも知れない。また西堀先生のご子息、西堀富士夫さんや西堀峯夫さんが先生の遺品の中から新たな資料を発見し「探検の殿堂」に提供があるかも知れず、それらによってこの報文を補強・修正しなければならないかもしれない。

アマチュア無線を趣味とする一人として、アマチュア無線が国際的な大事業にも貢献していたということは嬉しいことで、一日も早い時点でAACKから贈られた資料の展示を期待したい。また登頂成功を報じた朝日新聞の記事や、西堀峯夫さんから送られた「ヤルン・カン登頂中の通信記録」も合わせて展示するのが良いのではないかと考える。また、「大人の探検倶楽部」でアマチュア無線のクラブ局を「探検の殿堂」に設置し、南極との交信を含め世界の各国とも交信して、地元の青少年の世界への関心や、科学への探究心を育てられれば博物館として地域への貢献、存在意義はますます高まることであろう。

#### 謝辞

この報文は2008年4月18日に日本品質管理学会関西支部「QCサロン」でお話しさせて頂くためにまとめたもので、資料の提供を頂いた「探検の殿堂」の角川咲江学芸員は勿論、「探検の殿堂」を経由して貴重な資料や手記を寄せて頂いた西堀富士夫さん、西堀峯夫さん、また無線通信の日本側での資料の提供と手記を寄せて頂いた東條純一さん、まとめに当たって助言を頂いたモチベーション研究会の近藤良夫先生、井上潤さん、ほか多くの協力頂きました皆さんに御礼を申し上げます。

#### 参考文献

- 「ヤルン・カン」(1975), 京都大学学士山岳会編, 朝日新聞社発行
- 「西堀流新製品開発」(1979), 西堀榮三郎著, 日本規格協会発行
- 「品質管理心得帖」(1981), 西堀榮三郎著, 日本規格協会発行
- 「未知なる山・未知なる極地」西堀榮三郎選集2巻(1991), 唐津一他編著, 悠々社発行
- 「人生にロマンを求めて」西堀榮三郎選集別巻(1991), 唐津一他編著, 悠々社発行
- 「地球を愛した創意の旅人」(1994), 西堀榮三郎記念探検の殿堂開館記念出版, 湖東町発行
- 「西堀榮三郎ものがたり」, 西堀岳夫(資料協力), 滋賀県湖東町発行
- 「電のつく小道」(2004), 西堀榮三郎著, ワック株式会社発行